

序

中国文学において、唐詩の到達が中国詩の一つの頂点を作っている。その唐詩が花開く土壌となったのが六朝期（魏晉南北朝期）に生まれた文学である。おおよそ二二〇年から隋が統一する五八九年までの約三七〇年間（あるいは、一八四年から五八九年の間）である。この間、文学がさまざまな可能性を広げていった。

阮籍（二一〇～二六三）は、六朝期において極めて突出した詩人である。彼の文学を語る上で、八十二首からなる「詠懐詩」を考慮の外に置くことはできないだろう。「詠懐詩」はその独特な作風ゆえ、歴代の読者を魅了してきた。第四章「詠懐」と「言志」において詳しく取り上げるが、ここでも時代に沿っていくつかの資料を挙げ、「詠懐詩」がどのように読まれ、どのような評価を受けたのかを確認するとともに、本論文の問題意識を示しておく。

顔延之（三八四～四五六）は、もともと早くに「詠懐詩」に注を付けた人物として知られる。中でも、「阮籍は晋の文（司馬昭）の代に在り、常に禍患を慮り、故に此の詠を発するのみ」と、阮籍が生きた時代と作品とを結びつけた注は、後世に大きな影響を与えた。

鍾嶸（四六八～五一八）『詩品』は、漢から梁に至るまでの、「古詩（無名氏）」及び一二の詩人を上中下のランクに分け品評した書物である。阮籍ここでは上品に置かれ、次のように高く評価される。

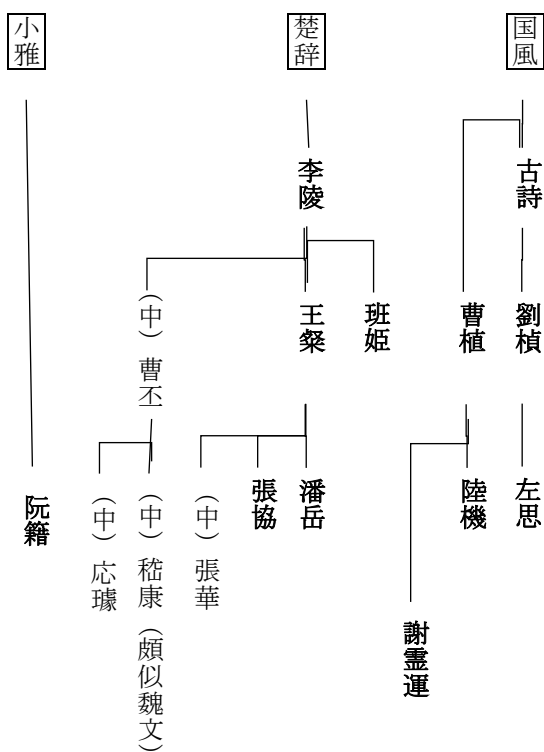
其の源は小雅より出づ。雕虫の功無し。而して詠懐の作、以て性靈を陶し、幽思を発すべし。言耳目の内に在り、情八荒の表に寄す。洋洋乎として風雅に会し、人をして其の鄙近を忘れ、自ら遠大に致らしむ、頗る感慨の詞多し。厥の旨は淵放にして、帰趣求め難し。顔延年（顔延之）の注解、其の志を言うを怯る

三〇。

表現が持つ喚起力の高さ、内面吐露の多さ、そして作品の難解さ、阮籍詩の特質を分析した上で、最後に先に言及した顔延之に触れる。

「其の源は小雅より出づ」に窺われるように、対象となる詩人（作品）を文学の流れの中に位置づけ、継承関係を示す特徴が挙げられる。『詩品』による詩人相互間の

系譜は次のとおりである。



国風、『楚辞』、小雅を詩の起源として置く。上品で取り上げられている「古詩」及び十一の詩人（表の太字部分）は、阮籍を除き、いずれも国風、あるいは『楚辞』を淵源とする。阮籍のみが、小雅のあとに連なる。また他とは異なり、その詩風を受け継ぐものは、上品のみならず中品、下品にも見出すことができな。鍾嶸は阮籍の文学を高く評価しつつも、孤立した存在として捉えていたとわかる^四。

もう一つ挙げよう。『文選』に注を施した唐・李善（六三〇〜六八九）は「しせう嗣宗〔阮籍の字〕は身乱朝に仕え、常にせし謗りに罹り、禍わざわいに遇うを恐る、因りて茲こゝに詠を発す、故に毎つねに憂生の嗟なげき有り^五」と、阮籍が「乱朝」に生きるゆえ、それに際しての苦悩（「憂生の嗟」）が詠出され、作品群が完成されたのだという。

顔延之「阮籍は晋の文〔司馬昭〕の代に在り」、鍾嶸「顔延年〔顔延之〕の注解、其の志を言うを怯る」、李善「しせう嗣宗〔阮籍の字〕は身乱朝に仕え」るに窺われるように、「詠懐詩」は、阮籍が生きた時代を強く意識させる文学として浸透した。また、文学の流れの中に置いたとき、『詩品』の系譜が示すように、異色な存在として受け止められた。

阮籍は正始という時代を生きた。

正始（二四〇～二四九）とは、魏斉王・曹芳の年号である。曹丕の跡を継いだ曹叡（魏明帝）が亡くなり、曹芳（八歳）が即位した年に始まる。この時、阮籍は三十歳であった。幼帝の補佐役に司馬懿と曹爽が任命される。二四四年、曹爽が蜀に負け戦をしたことで二者の間隙が広がる。その後も曹爽が朝廷の制度をたびたび改めたため、司馬懿は病氣と称し隠居し、密かに軍力を貯え、クーデターの準備を進めた。まさにこの時、阮籍は曹爽に召され尚書郎に就く。しかし、彼は危機を察知してか、まもなく病を理由に職を退く。

二四九年、曹爽が墓参りに出かけ、朝廷の留守に乗り、司馬懿は政変を起こす。この政変で、曹爽及び曹爽に仕えていた何晏らは処刑され、実権は司馬懿の手に渡った。仮に阮籍が当時、曹爽に仕えたままだったならば、あるいは彼らと同じように命を落としていたのかもしれない。

司馬氏に実権が移った後も、平穏な日々は訪れなかった。この間、阮籍の盟友として知られる嵇康が処刑されている。『晋書』阮籍伝に「名士 全する者 有ること少なし^六」という一文に端的に示されるように、「名士」が犠牲となった特殊な時代であった。阮籍は不安定な情勢にあって、処世に大変慎重であったと伝えられる。こうした時代に「詠懐詩」は詠まれた。

現代における阮籍「詠懐詩」研究は、作品の内部に入っていくとする傾向が見られる。テクスト外に存在する現実世界の特殊性を意識しつつも、どちらかといえば、作品そのものによって完結される研究が多い。概観を提示しておく。

一つは、作品群としての「詠懐詩」についてである。馮惟納は「籍 詠懐詩八十余首、必ず一時の作に非ず、蓋し平生時に感じ事に触れ、哀喜怫郁の情感焉に寄す^七」と、八十首以上ある作品群が一時の作ではなく、生涯かけてその折々の感情を綴ったものであるとする。清末・呉汝綸も同じ立場を取る（『古詩抄』）。今日に至るまで、こうした枠組みの中で「詠懐詩」は読まれているといえる。たとえば大上正美氏は、右のような制作過程を前提とした上で、その表現構造に注目する。氏は「敗北の構造を表現が獲得」していると指摘する。作品の中において、阮籍は現実から逸脱することへの志向を詠むが、しかし更なる憂思を抱え再び現実の中に回帰していくという。これを「敗北の構造」と理解する。表現者としての阮籍が絶えず現実に戻されることで、八十二首の「詠懐詩」が存在し得たのだと分析する^八。

一つは、「詠懐詩」が文学として有する特質である。吉川幸次郎氏は、詠出された思いに注目する。悲哀の感情（例えば、時間が推移することへの嫌悪、あるいは人間間の悪意を契機とする苦悩）、そこから導かれる過剰な生活への否定、更には人間界

からの離脱への希求、八十二篇を互いに関連付けながら「詠懐詩」を読み解く。同時に、吐露された感情の複雑さにも目を向け、「そうしたかく正直な心情の表白である点にこそ、阮籍の「詠懐詩」が、五言詩の歴史の上に、そうしたまたひいては中国史の歴史の上にしめる最も大きな意義があると、私は考える。すなわち、五言詩は阮籍において、知識人が、その人生観世界観を歌い得る文学となったと共に、知識人がもつとも正直にその心情を吐露すべき文学形式となる伝統も、ここに成立したと見得るからである」と述べる^九。

これに対し、銭志熙氏はやや異なる見解を示す。氏は作品中に見られる生命の捉え方を中心に取り上げ、「詠懐詩」に見られる悲劇性は伝統的な盛衰観を襲ったものであり、詩人としての創出は新たな思想的テーマを加えた点ではなく、むしろ言葉あるいはイメージの創新にあるとする^十。

日本における阮籍研究は、佐竹保子氏が「日本近半世紀「竹林七賢」研究状況」にてまとめられている^{十一}。多様な方向から阮籍詩が論じられている^{十二}。

本論文では、こうした先行研究を踏まえつつ、それとは異なる視角から「詠懐詩」を論じようとするものである。作品は作者の手から離れると、その読みは読者に委ねられる。阮籍「詠懐詩」がその詠み手である阮籍あるいは彼が生きた時代背景を強く喚起する文学として受け止められたこと、あるいは『詩品』において孤立した存在として捉えられたこと、こうした受容のあり方に関心を置きたい。そして、そこから浮かび上がる阮籍文学の特質に目を向け、「詠懐詩」の持つ独自性が中国文学の中でどのような役割を果たしたのかについて考察することを目的とする。

二部構成である。

第一部は、第一章「阮籍「詠懐詩」にみる時間の特質」、第二章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(一)」、第三章「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質(二)」の三章からなる。

阮籍の「詠懐詩」を読んで、まず感じられるのは、作品が帯びる一種の「暗さ」である。そうした「暗さ」は詠出された独特な世界観と表裏をなし、作品に個性を与えているように思う。第一部では、時間と空間から作品に展開された世界の特質を見ていき、同時に、文学の歴史の中で「詠懐詩」が孤立した存在と捉えられる所以についてわたしなりの見解を示すことができると考える。

阮籍「詠懐詩」における時間と空間の特質について、成瀬哲生氏はその論著「阮籍の詠懐詩―空間と時間」において、「空間表現においては、空間は、内から外へ拡大していくことによって阮籍と具体的関係をもっていた。しかし時間表現においては、

生に死の相を見る絶対相から、対象を表現するため、かえって、個々の対象の固有性、具体性が失われ、概念としてのことばがつらねられる結果となっている」と述べる^{十三}。

戸倉英美氏は、阮籍詩に見える時間、空間について更に詳しく考察する。しかし、「詠懐詩」を通観すれば、時間表現は図式的だが、空間表現に独特のすぐれたものがある」と、成瀬説を襲う^{十四}。

成瀬、戸倉両氏は大きな問題を指摘しているが、ともに作中の空間が「いかなるものとして」存在しているのかについてより関心が置かれている。両氏が十分に取り上げなかった時間にも注目し、空間と時間が「どのようなものとして」捉えられているのかについて関心を置く。

第二部では、受容のあり方から浮かび上がる阮籍文学の特質に焦点を当てる。第四章「詠懐」と「言志」では、なぜ他のことば、例えば「言志」ではなく、「詠懐」と呼ばれるようになったのかという疑問を出発点として、後世における阮籍詩の受容のあり方を考察するものである。第五章「六朝期における阮籍「詠懐詩」の受容」では、阮籍詩を模擬の対象とした江淹、庾信の作品を取り上げ、第四章とは異なる角度から阮籍「詠懐詩」の受容を論じたものである。第四、五章において、「詠懐詩」をめぐる概念的輪郭を受容という相において見ていく。

全五章にわたって、文学が織りなす歴史の中に阮籍「詠懐詩」がどのように位置付けられるのか、一つの方向を提示できればと考える。

一 陳伯君『阮籍集校注』、これ以降引用する阮籍「詠懐詩」はこれに拠る。「詠懐詩」のうち十七首は『文選』に収載されている。

二 『文選』卷二十三、阮籍「詠懐詩十七首」の李善が引く顔延之注。

三 (原文)「其源出於小雅。無雕蟲之功。而詠懐之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之内、情寄八荒之表。洋洋乎會於風、雅、使人忘其鄙近、自致遠大、頗多感慨之詞。厥旨淵放、歸趣難求。顏延年注解、怯言其志。」

四 高木正一氏はその論著『鍾嶸詩品』（東海大学古典叢書、一九七七）において、「小雅に淵源を有すると説明される詩人は、本書の中で阮籍ただ一人である」と述べた上で、以下のように理解する。「阮籍といえ、ただちに「詠懐詩」を思いうかべるが、その「詠懐詩」は、中に政治にまつわる人間社会に寄せる発言を、隠にして徹に含ませていること、鍾嶸は注意し、「小雅」に出ると述べたように判断する」と。また、『史記』の屈原伝

の「小雅は怨み誹れど乱れず」などを引いたうえで、「詠懐詩」もまた、ひそかに怨む発言はあっても、乱れない。その点、現実への激しい批判を含みながらも、その表現に節度を失うことのない小雅の詩と近似する、と鍾嶸は考えたのであろう」と分析する。

五 「嗣宗身仕亂朝、常恐罹謗遇禍、因茲發詠、故每有憂生之嗟。」（『文選』卷二十三「詠懐詩」其一「徘徊將何見、憂思獨傷心」の李善注）

六 「籍本有濟世志、屬魏晉之際、天下多故、名士少有全者、籍由是不與世事、遂酣飲爲常。」

七 該当文は陳伯君『阮籍集校注』（中華書局、二〇〇六年版）に馮惟納の言葉として引いたものである。『四庫全書珍本』に収められている明・馮惟納の『古詩紀』にこの一文は見当たらなかった。阮籍「詠懐詩」が成立過程について言及した代表的なものであると考えたため、本文に示した。（原文）「籍詠懐詩八十餘首、非必一時之作、蓋平生感時觸事、哀喜佛郁之情感寄焉。」

八 『阮籍・嵇康の文学』（創文社、二〇〇〇年、初出は「阮籍詠懐詩試論——表現構造にみる詩人の敗北性について——」『漢文学会会報』第三六号、一九七七年）また、史書に阮籍自身の行動として紹介される窮途の慟哭のエピソード、「時に率意、独り駕し、径路に由らず、車迹の窮まる所、輒ち慟哭して反る」は、「詠懐詩」の表現構造である「敗北の構造」に対応するものであるという。

九 『阮籍の「詠懐詩」について』（岩波書店、一九九〇年、初出は「阮籍の詠懐詩について上下」『国文学報』第五、六冊、一九五六年、一九五七年）

十 錢志熙『唐前生命觀和文学生命主題』（東方出版社、一九九七年）「阮籍体验生命悲剧性的主要方式仍然是传统的盛衰观。（中略）对于诗人来讲，他的最主要的创作不在于思想主题的增加，而在于语言意象的创新。」

十一 江建俊主編『竹林学的形成与域外流播』（里仁書局、二〇一〇年）所收。

十二 例えば、林田慎之助氏はその論著『中国中世文学評論史』（創文社、一九七九年、第三章「魏晋時代の詩人の思想」）の中で、「詠懐詩」に詠出された孤独に関心が置かれる。川合康三氏は「阮籍の飛翔」（『中国文学報』通号二九、一九七八年）において、「詠懐詩」に登場する大鳥と小鳥の形象、およびそれぞれが存在する空間について考察する。

十三 伊藤漱平編『中国の古典文学——作品選読』（東京大学出版会、一九八一年）

十四 『詩人たちの時空——漢賦から唐詩へ——』（平凡社選書一二〇、一九八八年）（初出は、「漢代六朝詩における空間表現の形式とその変化——漢賦から唐詩まで——」『東洋文化研究所紀要』第一〇二冊、一九八七年）